

地域を超えてチャレンジする  
みやぎ・やまがた・ふくしま  
女性の交流会

(第11回みやぎ・やまがた女性交流会)

第1部 パネルディスカッション

テーマ：「今、一步踏みだす勇氣」

パネリスト

稲葉 雅子氏

(株式会社ゆいネット代表取締役／  
宮城県仙台市)

福崎真知子氏

(ジーエスデザイン株式会社代表取締役／  
山形県米沢市)

宮原 育子氏

(宮城学院女子大学現代ビジネス学部長／  
山形県高島町)

コーディネーター

南條 成子氏

(フリーライター・エディター／  
宮城県仙台市)

《概要》

女性を取り巻く環境は、「みやぎ・やまがた女性交流会」が始まった11年前とは大きく変わり、女性の社会進出の機会が高まっています。女性管理職も多くなり、起業やキャリアアップに意欲的な女性が増えてきました。その一方で、なかなか「もう一步」を踏み出せない女性も少なくありません。そこで今回は、長年、女性経営者・管理職として活躍している方々をパネリストを迎え、「今、一步踏みだす勇氣」というテーマでパネルディスカッションを行いました。

●経歴・仕事内容

稲葉さんは宇都宮市の出身で、京都の大学に進学。卒業後、大阪で医療用コンピュータ販売会社に就職しました。大阪・東京で勤務したのち、東北の市場開拓のため仙台営業所長として赴任。平成12年、15年間勤めたその会社を退職し、仙台でコンピュータの知識を生かして「株式会社ゆいネット」を設立します。パソコンの使い方を教える講座からスタ

ートし、現在はIT関連事業を中心に、起業家を支援する「ちっちゃいビジネス開業応援塾」の企画運営などに取り組んでいます。さらに東日本大震災後の平成23年には、学びと旅の融合を目指す旅行会社「株式会社たびむすび」を設立しました。東北の農商工業との出会い・学び・体験を通して東北復興につなげる「まなび旅」事業を行っています。

福崎さんは、米沢市で生まれ育ちました。小学6年のとき、痛み止めの薬を飲み、アレルギーで全身の皮膚が火傷状態になってしまいます。その経験から薬科大学に進学し、薬剤師になって病院薬局と薬品卸問屋に十数年間勤務しました。しかし、クリエイティブな仕事がしたいと考え、昭和63年に退職。コンピュータの専門学校で1年間学び、平成元年に「ジーエスデザイン株式会社」を設立します。女性だけの会社で、CADを使った取扱説明書作成業務からスタートしました。現在は印刷物やホームページ制作を主に、米沢のご当地ヒーローを立ち上げてイベント業務を行うなど、商業デザインを幅広く手がけています。業務の拡大に伴って、平成12年から男性社員も採用するようになりました。

宮原さんは東京出身。大学受験に失敗し、専門学校に入って英語や英文タイプを学びました。卒業後は株式会社日本旅行に就職し、11年間勤務。しかし、「大学に行きたい」という思いが強くなり、昭和61年に退職して明治大学夜間部・地理学専攻に社会人入学します。以後11年間、東京学芸大・東京大と移りながら研究生生活を送ったのち、平成9年に旅行・観光の経験を活かして新設の宮城大学事業構想学部の講師に。助教授をへて教授として平成28年3月まで勤務しました。そして、同年4月から宮城女子学院大学に新しく設立された現代ビジネス学部の部長に就任し、新しい学部づくりを行っています。住まいは高島町ですが、平日は仙台で仕事、週末に夫のいる自宅に戻るライフスタイルです。

●転機や決断したこと

稲葉さんの転機は、1つは親元を離れて京都の大学に進学したこと、2つめは大阪の会社に就職したこと、そして3つめが15年間勤めた会社を辞めたことでした。また、夫の転

勤と一緒にいて行くと会社を辞めなければならぬため、週末婚を覚悟で自分の仕事と夫の仕事をきっちり分ける決断をしました。そして退職後、なかなか再就職先が見つからなかったときに、ある人から「コンピュータの使い方を教えることを、自分でやったらいいのではないか」と言われます。自分で会社を作るという方法があると知り、起業したことが一番大きな転機になりました。

福崎さんは、兄から「これからはコンピュータの時代」と言われたことが最初の転機でした。IT関係がどんどん出てきている時代で、薬剤師を辞め、コンピュータの専門学校で1年間、学びます。卒業後、コンピュータ関連の仕事をしていた実家の会社と対等に取引するため、公証役場に8回通い、自力で会社を設立。女性だけでスタートしました。仕事は順調で社員も増えていきましたが、平成10年に実家の会社が破綻。そのとき、会社をどうするか悩み、社員に「会社に残るか、辞めるか」の選択を任せます。その結果、半数の社員が残り、再スタートを切りました。

宮原さんの最初の転機は、11年間勤めた会社を辞め、大学に入ろうと考えたことです。当時、社会人で大学に入る道は非常に狭く、勇気のいる決断でしたが、一步踏み出し、明治大学の地理で社会人入学第1号になりました。2つめの転機は、宮城大学に入った後です。女性で職位の低い教員の考えはなかなか反映されず、何度も辞めようと思ったものの辞めなかった、これは大きな決断でした。昨年、宮城学院女子大学に移るときも大変悩んで決断しましたが、「自分はパイオニア的なチャレンジが多く、新しい世界を切り開く役割を求められることが多い」と語ります。

### ●今、一步踏み出すためのアドバイス

稲葉さんは、「一步」は皆さんそれぞれに違うので、自分の一步はこれくらいだということを理解し、他の人と比べず、「私の一步はこれだ」と自信を持ってほしいとアドバイス。起業するときから大切にしている「できるかできぬかわからぬことは、できると思って努力せよ」という言葉を紹介し、「できないかとも思うと、頭の中は“できないこと、を前提にして考えていく。だから“今はでき

ないが、できる、”とあって、どうしたらできるかを考える。“できる、”という方向から船出していくと、できる方向に行くのではないかと思う」と話しました。

福崎さんは、「一度きりの人生、平坦な道を行くのではなく、階段を一步ずつ上がっていきたい。その勇気は自分で奮い立たせなければいけないが、肩肘張らずに自然体で」と話し、日々の仕事はなるべく穏やかに、精神的なアップダウンがないように心がけているとのことでした。また、女性だけでスタートした会社なので、当初は男性社長から「女に何ができる」と言われましたが、設立から7年過ぎると信頼されるようになった経験を紹介。「新しいビジネスを始める人は2、3年であきらめず、7年はやると考えて続けてほしい」とアドバイスがありました。

宮原さんは、「一步踏み出すとあまり意識しなかったが、辛いときというのは自分の未熟さが自分で見えず、後になってそれに気づいた」と振り返り、「どこかで踏み出さないと、その気づきや思いを経験することもできないので、まず勇気を持って一步進むことが重要だと思う」と語りました。さらに、いろいろな年代の人と楽しくつきあって、それぞれが高め合っていくこと、転機を迎えたときは生活資金・活動資金の経済的な裏付け、自身や家族の健康も大事で、「周りに自分の話を聞いてくれる人がいてくれることが、一番の後押しになる」とのことでした。

### ●質疑

会場から、「プライベートと仕事をどう切り替えているか」という質問があり、福崎さん宮原さんは「家に帰って料理をすることが切り替えのスイッチ」という答でした。「起業する場合、現実的な経営と夢や目的とのバランスをどう調整していけばいいか」という質問には、稲葉さんが「何でやりたいかという理由をよく考えて、自分で決めることが大事。その指針は時間軸と金額軸」と答えました。他に、「高校や大学時代の部活動・サークル活動、アルバイトで、今につながっていることは何か」「仕事と家庭の両立、女性の仕事に対して男性の意識改革、理解を求めるには」といった質問が出ました。